

平成29年度 宮崎県立高城高等学校との連携事業報告

一 「課題研究」ナタ・サポの取組み

古賀隆一
早川純子
藤本朋美
五十嵐亮
宮内孝
春日由美

平成29年3月28日(火)南九州大学と宮崎県立高城高等学校による連携協定を締結した。「相互の資源および機能を活かし、教育・研究及び地域社会の発展に資すること」が本協定の締結の目的である。連携事項は、「1.教育の充実・発展に関すること」「2.学術研究の充実・発展に関すること」「3.地域社会の発展に関すること」「4.その他、双方が必要と認める事項」であった。

そこで、人間発達学部子ども教育学科は、この協定に基づいて高城高等学校の生徒が取り組む課題研究、特に保育分野の学習支援「ナタ・サポ」に取り組んだ。「ナタ」とは、南九大（ナンキョウダイ）による高城高校（タカジョウコウコウ）サポート事業のことである。

本年度は、本学科教員が下記の2つの内容についてサポートした。

1. 保育分野に必要な表現系の知識や技術の習得を目指した学習支援
2. 「ちびっこ運動会」の企画・運営のための学習支援

本稿では、このサポートの概要について報告する。

1. 保育分野に必要な表現系の知識や技術の習得を目指したサポート

保育分野において必要な、表現リズム、造形、言語表現の知識や技術習得を意図とした学習支援である。具体的には、下記の目的が高校から示された。

- 衣食住・保育等のスペシャリスト育成のため、学習の高度化を図った学習に取り組む。具体的には、保育検定の分野にもなっている表現

リズム、造形、言語表現などに関する実技指導の充実を図る。

- 大学と連携をした授業を展開することで、より専門性の高い学習へ興味関心がわき、将来、大学に進学し、地域貢献できる人材育成に繋げる。

このような目標達成に向けて、本学科教員が下記の講義を行った。

- (1) 造形表現 担当：古賀 隆一

◇日時：平成29年6月16日(金)
13時25分～15時05分

◇対象：3年生(4名)

◇場所：宮崎県立高城高校

◇日時：平成29年6月22日(木)
13時30分～15時00分

◇対象：1年生(40名)

◇場所：南九州大学都城キャンパス

◇講座内容

保育分野の専門的な学習の充実を図るため、生活文化科1年生40名が受講した。本学が幼、保、小、特支の教員資格取得を目標としているところから、幼児教育の中でも造形表現、図画工作の中で主に幼児画を中心に講じた。大人と子どもの絵画表現の違いを認識するところから理解を進める必要がある。子どもの絵の捉え方を、理解する上で、幼児期の発達段階から見た心象表現は感性の働きや情操教育の想像性から創造力が生まれ、人間形成や人間力に繋がることを伝えた。掛け図を使って美術の基本的な色彩や基礎デッサンについて解説した。色の成り立ちや、デッサンで使用する

る明暗の考え方や使い方の捉え方は、作例を基に説明を加えた。美術教育は生活の領域で幅広く奥行きもあり、文化の原点の一つでもあるから、幼少期の無文字時代の子どもの表現教育には、特に指導と援助学習研究の必要性を強調した。生徒の皆さんの真剣さが伝わった講座だった。



(2) 表現リズム 担当：早川 純子

◇日 時：

- ①平成29年5月26日(金) 13時25分～15時5分
- ②平成29年5月29日(月) 13時25分～15時5分
- ③平成29年6月23日(金) 13時25分～15時5分
- ④平成29年7月25日(火) 14時～15時30分
- ⑤平成29年12月8日(金) 14時30分～16時30分
- ⑥平成29年12月12日(火) 15時～17時
- ⑦平成29年12月25日(月) 13時30分～16時30分

◇対 象：2年生(3名)、3年生(6名)

◇場 所：南九州大学都城キャンパス(①②)、
高城高等学校(③～⑦)

◇講座内容

保育に関する技術・検定指導の中で、主に弾き歌いを含めたピアノ実技と楽典を中心に指導を行った。講義では、技術だけではなく、音楽表現活動の実践と援助の仕方、また楽典で学んだ音楽の諸要素と音楽表現活動の関わりについても触れるように努め、保育に必要な豊かな感性を育むことも目指した。

受講者の中には、検定試験を目的としない生徒も含まれたが、主に2年生は夏期に3級、冬期には2級を、3年生は夏期の3級受験者を含め、夏期、冬期ともに1級の受験を目指す生徒もいた。受講

者のピアノ経験は、初学者も含まれ、経験年数は個々に異なっている。また、独学で相当程度演奏技術を身につけた生徒もいた。

各級に共通するのは、ピアノソロであるバイエルからの楽曲。そして、1級にはさらに弾き歌いと楽典が課されている。弾き歌いの楽曲には、跳躍進行や借用和音など複雑なコードを含むものもあり、高度な技術を要する曲もあった。楽典は、譜表、音符、休符、拍子などの基本的事項に加え、音程、音階、調性、和声など音大入試に含まれるような高度な項目も含まれた。生徒たちは、難易度の高い内容にも拘らず、実技も座学も真面目に、かつ良く質問をしながら熱心に受講した。

(3) 言 語 担当：藤本 朋美

◇日 時：平成29年6月9日(金)
平成29年6月30日(金)
13時25分～15時15分

◇対 象：3年生

◇場 所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

- ①「言葉を育てる遊び」にはどのような遊びがあるのか、その種類を知る。(児童文化財：絵本、紙芝居、お話、わらべうた、言葉遊び等)
 - ②「絵本」を通して子どもたちに何が育つのかを考える。
 - ③絵本の読み聞かせを行い、その留意点を知る。
- 以上3点をねらいとして、実際に絵本に触れながら演習形式で行った。

絵本の多様さを知ってほしいと考え、各回ともに20冊程度の絵本を持参した。高校生に提示したところ、「幼いころに読んだことがある」「懐かしい」「読みたい」等の歓声があがったため、実際に手に取り、自由に読むことから講座をスタートした。保育検定を見据えた実技指導という側面だけでなく、絵本の魅力や絵本が子どもたちに与える影響について、高校生が自身の実感を伴いながら考える時間となった。

2. 「ちびっこ運動会」の企画・運営のためのサポート 担当：宮内 孝

「ちびっこ運動会」とは、生活情報科2年生の

生徒が高城幼稚園児を招待して実施する運動会のことである。この運動会の企画・準備そして当日の運営を行う体験を通して、今までの学びを活用させる。そして、実際に幼児にふれる体験を通して、幼児理解を深めたり、新たな学びを獲得させたりして、今後の学習への動機付けを図ることを目的としていた。

(1)「ちびっ子運動会」開催に向けてのワークショップ

◇日 時：平成29年9月20日（水）

13時30分～15時00分

◇場 所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

幼児の発達段階を踏まえた運動会種目の内容や子どもへの指示・説明の仕方などについて、実技を交えて行った。

運動会種目については、年長児童（5、6歳）にとって、簡単でしかも勝敗が明確にわかる運動遊びを紹介した。

また、高校生を幼児と見立てて実技をするなかで、子どもへの指示・説明のあり方にもふれた。本学科学生も参加し、本ワークショップの運営をサポートした。

(2)「ちびっ子運動会」の装飾等制作支援

◇日 時：平成29年9月27日（水）

9時20分～12時30分

◇場 所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

「ちびっ子運動会」当日の装飾や手渡すメダルなどの制作計画の話合いに、本学科の学生4年生が参加した。

高校生は、制作物のイメージや制作手順などについて、グループ毎に話し合っていた。その話合いに、大学生も参加して助言を行った。

大学生は、保育・幼稚園実習や大学の授業での学びを活用しながら、高校生に具体的に助言をしていた。大学生から助言を得て、高校生は制作の具体像を明確にした。

(3) チャレンジ運動教室でのワークショップ

◇日 時：平成29年10月21日（土）

9時20分～12時20分

◇場 所：南九州大学都城キャンパス

◇講座内容

「ア.ちびっ子運動会」開催に向けてのワークショップの学びを活用させることと、幼児の発達段階などの幼児理解を深めることを目的として、チャレンジ運動教室へ参加してもらった。

チャレンジ運動教室とは、地域の幼児（4歳から6歳）・児童（小学校1、2年生）とその保護者を対象とした運動教室である。本教室の企画・運営は、宮内と宮内ゼミの学生が実施している。

本教室に参加する子どもを8グループに分けて、大学生が当該グループの指導者となる。高校生は、大学生の補助を行いながら、子ども理解を深めていた。

(4)「ちびっ子運動会」活動のまとめ

◇日 時：平成29年11月22日（水）

9時45分～10時30分

◇場 所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

「ちびっ子運動会」の振り返りとして、「運動会で取り上げた種目の内容」と「運営に関わるマネジメント」のよさについて講義を行った。

運動会で取り上げた種目の幼児期に身につけておきたい「多様な動きが確保されていたこと」や挑戦意欲を高めさせるために必要な「やさしく、おもしろさ」が確保されていた。また準備や進行が円滑に行われたことで「無駄な時間が少なかったこと」そして、子どもへの対応が笑顔で賞賛も多かったことで「明るく、穏やかな雰囲気であったこと」について指摘した。

このような生徒が行った計画・運営のよさの意味づけを行うことで、生徒の達成感やあるいは自己肯定感をさらに高めるきっかけとなったようである。

3. 「ナタ・サポ」を振り返って

担当：五十嵐 亮・春日 由美

「ナタ・サポ」は、本年度から始まった取組みである。高城高校と協議を重ねて取り組んできた。その取組みの成果の一端を五十嵐・春日が作成・

分析した『「ナタサボ課題研究」の体験が学習意欲や自身の技能態度の認識に与える影響』の調査結果によって示す(調査結果の詳細は、別紙参照)。

この調査は、前述した「ちびっこ運動会」でサポートした高校2年生を対象として実施されており、課題研究の体験が、生活に関する満足度や学習意欲、自身が持つ技能態度に対する認識の変化に繋がるか否かを検討することを目的として行われた。

課題研究前後に、近藤・鎌田(1998)の作成した「生きがい感スケール」及び高橋・竹嶋・青木(2013)の作成した「生きる力尺度」を用いた質問紙調査を行った結果、「生きがい感スケール」の全体得点が上昇し、「生きる力尺度」の内「チャレンジ」得点が上昇した。この得点は、「これから起こることがわからない方がわくわくする」等の項目で構成されており、課題研究参加を通して新たな活動に挑戦する意欲が高まったことを示唆している。

今後は、高城高校との連携をさらに深めながら、連携協定の目的達成を目指していきたい。

<別紙> 「ナタサボ課題研究」の体験が学習意欲や自身の技能態度の認識に与える影響

「ナタサボ課題研究」の体験が、生活に関する満足度や学習意欲、自身が持つ技能態度に対する認識の変化を検討することを目的とする。

そのため、「ナタサボ課題研究」前後に、近藤・鎌田(1998)の作成した「生きがい感スケール」及び高橋・竹嶋・青木(2013)の作成した「生きる力尺度」を用いた質問紙調査を行った。

「生きがい感スケール」は、「私はいまの生活に満足感があります」等の「現状満足度」に関する5項目、「暖かい日差しの中でよく昼寝を楽しみます」等の「人生享楽」に関する6項目、「私は他人から信頼され、頼りにされています」等の「存在価値」に関する11項目、「私は将来に希望を持っています」等の「意欲」に関する9項目の4因子31項目で構成されており、そのうち、「人生享楽」に関する6項目を除外した25項目を用いて質問紙調査を行った。評定は「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3段階で、「はい」の回答から順

に3～1点と得点化した。

「生きる力尺度」は、「急な変化にもすばやく対応できる」等の「社会的対処スキル」に関する7項目、「みんなと協力して生きていきたい」等の「協力志向」に関する4項目、「劇や映画を見たり、本を読んだりすると、自分が登場人物の一人になったように感じる」等の「コミットメント」に関する5項目、「困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない(逆転項目)」等の「共感」に関する2項目、「これから起こることがわからない方がわくわくする」等の「チャレンジ」に関する2項目の5因子20項目で構成されており、そのうち、「コミットメント」に関する5項目を除外した15項目を用いて質問紙調査を行った。評定は「とてもよく当てはまる」「よく当てはまる」「少し当てはまる」「ほとんど当てはまらない」「まったく当てはまらない」の5段階で、「とてもよく当てはまる」の回答から順に5～1点と得点化した。

「生きがい感スケール」については、先行研究の尺度構成に従い、3つの下位尺度を構成した。各下位尺度の項目得点の総和を項目数で除し、各々、「現状満足度」得点($a = .87$)、「存在価値」得点($a = .92$)、「意欲」得点($a = .87$)とした。各下位尺度の平均値と標準偏差は表1の通りであった。

「時期(2条件)」「下位尺度(3条件)」を独立変数とする、被験者内2要因計画の分散分析を行った結果、交互作用が有意ではなく($F_{(2,62)} = 0.06, n.s.$)、「時期(2条件)」の主効果のみ有意であった($F_{(1,31)} = 16.54, p < .01$)。

次に「生きる力尺度」については、先行研究の尺度構成に従い、4つの下位尺度を構成した。各下位尺度の項目得点の総和を項目数で除し、「社会的対処スキル」得点($a = .91$)、「協力志向」得点($a = .89$)、「共感」得点($a = .84$)、「チャレンジ」得点($a = .90$)とした。各下位尺度の平均値と標準偏差は表2の通りであった。

「時期(2条件)」「下位尺度(3条件)」を独立変数とする、被験者内2要因計画の分散分析を行った結果、交互作用が有意傾向であった($F_{(3,93)} = 2.45, p < .10$)。「時期(2条件)」の単純主効果を

検定したところ、「チャレンジ」得点においてのみ有意であり、「ナタサポ課題研究前」よりも「課題研究前後」の方が有意に高かった ($F_{(1,31)} = 3.09, p < .10$)。次に、「下位尺度 (4条件)」の単純主効果を検定したところ、各時期 (2条件) において有意であり、「ナタサポ課題研究前」においては、「社会的対処スキル」「チャレンジ」よりも「協力志向」の方が、「協力志向」よりも「共感」の方が有意に高かったが ($F_{(3,93)} = 29.96, p < .01$)、「ナタサポ課題研究後」においては、「社会的対処スキル」「チャレンジ」よりも「協力志向」「共感」の方が有意に高かった ($F_{(3,93)} = 15.79, p < .01$)。

表1：「生きがい感スケール」の下位尺度得点

			ナタサポ 前	ナタサポ 後
生き がい 感	現状満足度	Mean (SD)	2.33 (0.52)	2.49 (0.47)
	存在価値	Mean (SD)	2.31 (0.47)	2.47 (0.41)
	意欲	Mean (SD)	2.35 (0.43)	2.50 (0.44)

異なるアルファベット間で有意差あり
+ : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$

表2：「生きる力尺度」の下位尺度得点

			ナタサポ 前	ナタサポ 後
生き る 力	社会的対処スキル	Mean (SD)	3.07 a (0.81)	3.20 a (0.88)
	協力志向	Mean (SD)	3.91 b ** (0.85)	3.88 b ** (0.90)
	共感	Mean (SD)	4.38 c ** (0.74)	4.25 b ** (0.80)
	チャレンジ	Mean (SD)	2.84 a (1.16)	3.16 a (1.27)

異なるアルファベット間で有意差あり
+ : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$